

114  
A1748



貨幣鑄造ノ事

造幣寮

創業

明治

二年

三月

十日

開寮

以テ

創業

トシ

レ同

ニ倣ニ以來鑄造スル所ノ貨幣ハ金貨貳拾圓拾圓

五圓貳圓壹圓ヲ本位トナシ銀貨五拾錢貳拾錢

拾錢五錢ヲ補助トナシ銅貨ヲシテ之レニ屬セ

シメ而シテ特ニ一種ノ銀貨ヲ制シテ以テ海外

貿易ノ流通ヲ資クルモノトス初メ該寮創建ノ

際明治九年銀貨ヲ本位トナスノ議決スト雖モ開寮

ニ及フノ後熟考スルニ蓋シ貨幣ノ實理ヲ失ヒ

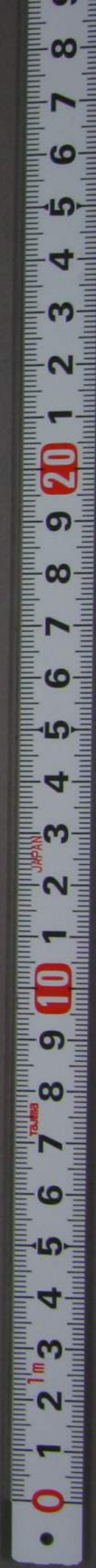
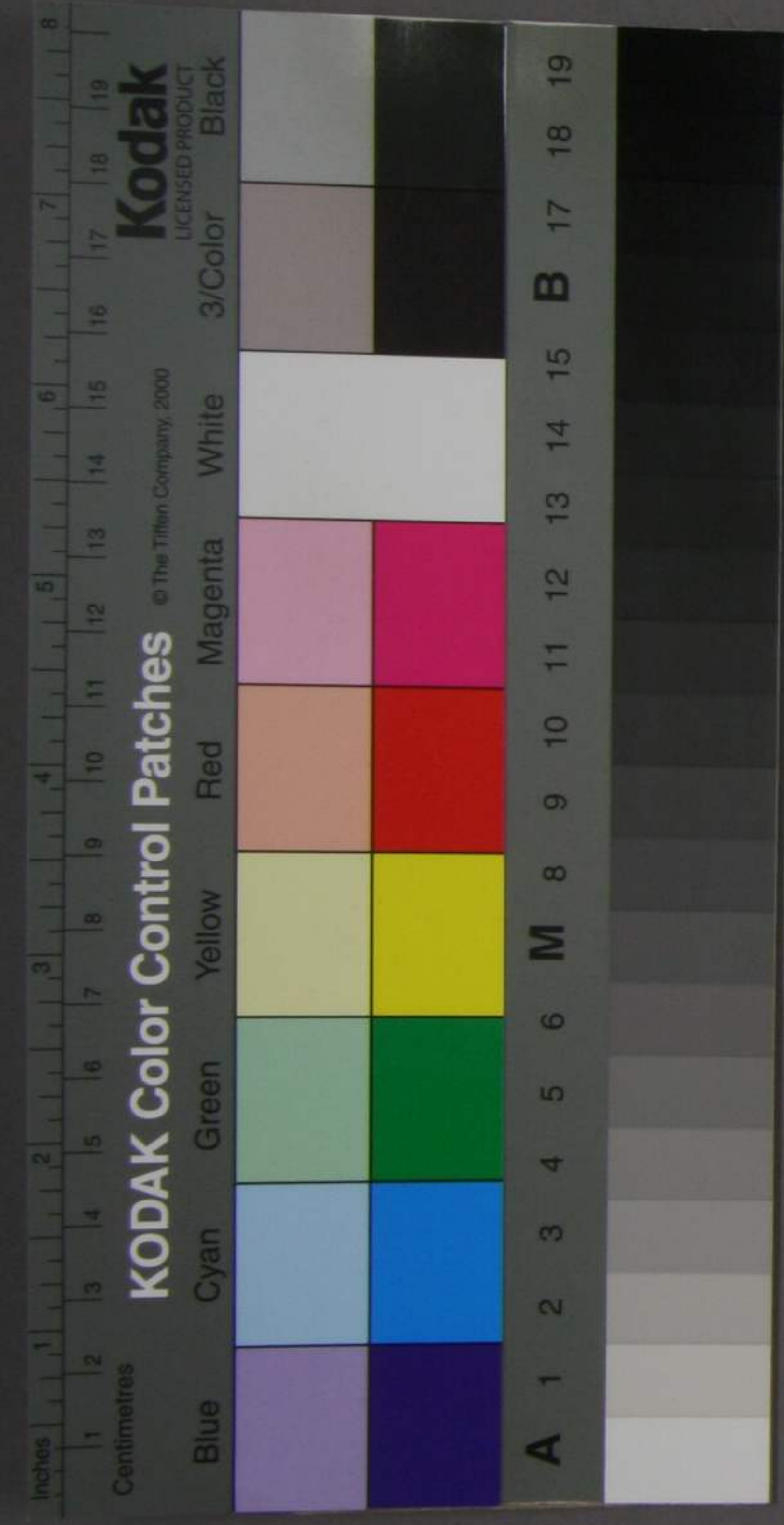
流通ノ際其宜キヲ得サラントテ恐ル、所アリ

乃チ為メニ尚ホ廣ク歐米諸國金銀貨幣ノ制度

ヲ考覈シ特ニ本邦ノ金鑛將來盛ニ開ケンニ

注目シ更ニ當時各國貨幣ノ重量ヲ商量折衷シ

大正十一年四月  
大隈侯爵郵寄贈





金貨ノ製造

所謂「メトリック」ノ公秤量法ニ基キ新ニ貳拾圓ノ金貨ヲ製造シ其重量ハ純金三拾「グラム」金位拾分ノ九ニシテ金量三拾三「グラム」三分ノ壹ト定メ其他拾圓五圓貳圓壹圓ノ金貨モ此比例ニ準シテ其重量ヲ更正シ之レヲ以テ本位ト定メ就中壹圓金ヲ本位中ノ原貨トナシ從テ前議壹圓銀貨ノ本位タルヲ廢シテ之レヲ貿易銀トナセシハ實ニ明治四年五月新貨條例ヲ頒布セラレ、ノ際タリキ

爾來本年ニ至ルマ銅貨幣各種鑄造ノ往ニ徴シ以テ將來トス

(金貨鑄造ノ事) 明治四年六月十五日始メテ内外人民ノ望ニ應スルヤ當時鑄造ヲ請フモノ甚タ多ク其器械乏少ニシテ其請ヒニ充ツル實ニ難キニ至ル乃チ明治五年五月十二日ノ令ヲ請ヒ六月十日ヨリ一時内外人民ヲシテ造幣ノ為メ地金ヲ輸入セサラシメ而シテ大ニ新機關及ヒ諸器械ヲ増加シ同年十月落成ニ至テ再ヒ内外人民ヲシテ地金ヲ輸入セシメタリキ然ニ爾後金地金ノ輸入前日ノ如クナラス却テ當時内外人民ノ銀地金ヲ輸入スルモノ多キニ尚ホ金一、銀一六ノ割合ニ比較シテ金貨ヲ附與スヘキ規則タルニヨリ為メニ政府ノ損失甚シキニ至ラントス乃チ明治六年十二月十九日ノ令ヲ請



金貨ノ製造

所謂「メトリック」ノ公秤量法ニ基キ新ニ貳拾圓ノ金貨ヲ製造シ其重量ハ純金三拾「グラム」金位拾分ノ九ニシテ金量三拾三「グラム」三分ノ壹ト定メ其他拾圓五圓貳圓壹圓ノ金貨モ此比例ニ準シテ其重量ヲ更正シ之レヲ以テ本位ト定メ就中壹圓金ヲ本位中ノ原貨トナシ從テ前議壹圓銀貨ノ本位タルヲ廢シテ之レヲ貿易銀トナセシハ實ニ明治四年五月新貨條例ヲ頒布セラレ、ノ際タリキ  
爾來本年ニ至ルマテ造幣ノ事蹟ニ就テハ金銀銅貨幣各種鑄造ノ緩急各一ナラス今之レヲ既往ニ徴シ以テ將來措置ノ方向如何ヲ開申セントス

若シ短キ際ニ至リ

〔金貨鑄造ノ事〕

明治四年六月十五日始メテ内  
外人民ノ望ニ應スルヤ當時鑄造ヲ請フモノ甚  
タ多ク其器械乏少ニシテ其請ヒニ充ツル實ニ  
難キニ至ル乃チ明治五年五月十二日ノ令ヲ請  
ヒ六月十日ヨリ一時内  
外人民ヲシテ造幣ノ為  
メ地金ヲ輸入セサラシメ而シテ大ニ新機關及  
ヒ諸器械ヲ増加シ同年十月落成ニ至テ再ヒ内  
外人民ヲシテ地金ヲ輸入セシメタリキ然ニ爾  
後金地金ノ輸入前日ノ如クナラス却テ當時内  
外人民ノ銀地金ヲ輸入スルモノ多キニ尚ホ金  
一、銀一六ノ割合ニ比較シテ金貨ヲ附與スヘキ  
規則タルニヨリ為メニ政府ノ損失甚シキニ至  
ラントス乃チ明治六年十二月十九日ノ令ヲ請



ノ公秤量法ニ基キ新ニ貳拾圓  
其重量ハ純金三拾「ガラム」金位  
金量三拾三「ガラム」三分ノ壹ト  
圓貳圓壹圓ノ金貨モ此比例ニ  
更正シ之レヲ以テ本位ト定メ  
位中ノ原貨トナシ從テ前議壹  
ルヲ廢シテ之レヲ貿易銀ト十  
四年五月新貨條例ヲ頒布セラ  
マテ造幣ノ事蹟ニ就テハ金銀  
ノ緩急各一ナラス今之レヲ既  
來措置ノ方向如何ヲ開申セン

明治四年六月十五日始メテ内  
志スルヤ當時造幣ヲ請フモノ甚  
之少ニシテ其請ヒニ充ツル實ニ  
明治五年五月十二日ノ令ヲ請  
一時行外ノ民ヲシテ造幣ノ為  
サラシメ而シテ大ニ新機關及  
シ同年十月落成ニ至テ再ヒ内  
金ヲ輸入セシメタリキ然ニ爾  
前日ノ如クナラス却テ當時内  
金ヲ輸入スルモノ多キニ尚ホ金  
ニ比較シテ金貨ヲ附與スヘキ  
為メニ政府ノ損失甚シキニ至  
治六年十二月十九日ノ令ヲ請

若シ短文ナラシラ欲セハ各種鑄造ノ事蹟ニ  
降キテ直チニ本文「抑進況字内各圖」ノ條ニ  
接續スルモノ亦タ可ナランカ



フテ造幣規則第四條ヲ改定シ壹圓銀ヲ附與ス  
ヘキトナセリ而シテ明治七年ニ至テ金貨ノ  
鑄造著シク減少シ貳拾圓貨拾圓貨ノ鑄造アル  
ナカリキ蓋シ當時ノ為換相場金貨鑄造ノ為  
ニ不利益ナルノミナラス既ニ人民ノ要望スル  
改鑄モ亦タ漸ク相克チ其流通ノ高全國人民一  
口毎ニ平均凡壹圓半ニ當ルヘキニ由テ然ルナ  
リ此時ニ當テ民間尚ホ旧金銀貨幣ヲ匿藏シ加  
之或ハ之レヲシテ海外ニ滲出セシムルノ勢ニ  
至レリ於是同年九月五日ノ令ヲ請フテ旧金銀  
貨幣價格比較表ヲ頒布シ人民ノ旧金銀貨幣ヲ  
シテ相互ノ取引ヲ廢止シ之レヲ新貨ト交換セ  
シメ或ハ之レヲ政府ノ租稅等ニ公納セシム又

明治八年四月廿日ノ令ヲ請フテ造幣規則ノ改  
正ヲ公布スルニ方テ造幣ノ為メ受取ルヘキ金  
地金從前百五十オン凡壹貫貳百以上ノ高ヲ  
遞減シテ只々五十オン凡拾貳百以上トセリ是  
ニ至テ金貨ノ鑄造ハ聊カ相増スト雖モ尚ホ五  
圓貨ノ一種ノミニ過キス殊ニ金貨ヲ要望スル  
ノ所甚ク少ナク特リ英國ニ歸シ其鑄造ヲ為ス  
ハ殆ンテ無益ニ屬シ寧口精製塊トシテ外債償  
却等ノ為メニ輸出スルニ如カサルノ勢ニ至レ  
リ因テ八月十二日主務ノ寮ニ令シテ政府ノ金  
地金ハ總テ金塊ニ作ラシメ以テ今日ニ至レリ  
其他内外人民ヨリ輸入スル金地金ヲ鑄造スル  
モ依然トシテ專ラ五圓ノ一種ニ過キス蓋シ此



一種ハ大小ノ中ヲ得テ最モ流用ニ便ナルニ由  
テ然ルナリ

(貿易銀貨鑄造ノ事)

創業ノ際試験ノ為メ專ラ

政府ノ銀地金ヲ以テ之レヲ鑄造シ翌年六月十  
六日以降内外人民ノ要望ニ應スルヤ亦タ當時  
鑄造ヲ請フモノ金貨ヨリモ甚タシク陸續トシ  
テ日モ尚ホ足ラサルカ如シ蓋シ開寮ノ日未タ  
幾許ヲ經ス且當時洋銀ノ價甚タ低下セシニ由  
テ然リ故ニ鑄造ノ時間ヲ増加シ及々勉勵セシ  
ムルト雖モ機械ノ力限ケアリ既ニシテ同年十  
月ニ至テ人民ノ要望ヲ満足スルニ足ラズ却テ  
其信ヲ失ハンコトヲ憂フルモノナラス尚ホ恐ラ  
クハ其器械ノ損害アラシク於是止ムヲ得ス

機械ノ破損ヲ名トシテ同年十月廿五日ノ令ヲ  
請フテ人民ヲシテ銀地金ヲ輸入セサラシメ而  
シテ日ヲ經テ大ニ新機關及ヒ諸器械ヲ增加セ  
リ然レモ當時補助銀貨ノ鑄造未タ多カラス從  
テ民間ノ流通不便セラシムルヲ恐ル、ノミナラ  
ス又本位金貨ニ抵抗障礙アルヲ恐ル故ニ翌明  
治五年三月ニ至テ主務ノ寮ニ令シテ政府ノ壹  
圓銀貨モ亦タ鑄造スルヲ停メ只補助銀貨ノミ  
ヲ鑄造セシメ延テ明治七年ニ至レリ而シテ同  
年三月十三日ノ令ヲ請フテ同月十六日ヨリ再  
ヒ内外人民ノ銀地金ヲ受取り同月廿日ノ令ヲ  
請フテ壹圓銀貨ノ圖面ヲ改正シ專ラ之レヲ鑄  
造セシムルヤ其面上ニ量目品位及ヒ價直ヲ明



掲シ以テ内外人民ノ認識ニ便セリ蓋シ此貨幣ヲシテ夥シク世上ニ發行シ暗ニ墨斯哥「ドル」ル「ト」頓頓セシメントスル所以ナリ於是此貨幣獨リ我カ各開港場ニ行ハル、ノミナラス又支那阜頭ニ於テモ流通稍開ケ英領新嘉坡及ヒ支那廣東福州ノ如キハ墨斯哥「ドル」ラルト等シク通用貨幣タラシムルニ至レリ然ルニ當時米國貿易銀ノ量目ハ四百貳拾「ダレイ」ニシテ我カ貿易壹圓銀ハ四百拾「ダレイ」ナルニ由テ聊カ其劣位ニ居レリ故ニ翌明治八年二月廿八日ノ令ヲ請フテ增量シ以テ四百貳拾「ダレイ」トナシ更ニ貿易銀ト名ケ量目ノ公差ハ減シテ千分ノ壹「ダレイ」トシ純分并其公差ハ故ノ如ク

シ同年三月四日ニ至リ來ル四月一日以降内外人民輸入ノ銀地金ハ悉ク此改正貿易銀ニ鑄造シ以テ附與スヘキ旨ヲ布達シ従前百ニ付二ノ鑄造手數料ヲ減シテ百ニ付一、半トセリ當時人民ノ鑄造ヲ乞フモノ極少ナリト雖モ近時東洋地方銀價ノ低下夥甚ナルノミナラス我銀貨ヲ需要スルモノ愈多キヲ見レハ將來必ス銀地金ヲ輸入シテ之レカ鑄造ヲ請フモノ日一日ヨリ多キニ至ラン「ト」立テ誤ツヘキノミ補助銀貨鑄造ノ事 創案ノ際試驗ノ為メ亦タ既ニ鑄造ヲ始メタリ而シテ明治九年三月以降銀貨ノ鑄造ハ專ラ此貨幣ノミタラシムル「ト」明治七年ニ至レリ初メ此貨幣ノ量目ハ本位壹圓



金ノ秤量ニ準據シ既ニ創業以來若干ノ鑄造アルヤ未々其額多カラサルニ其利益ハ頗ル大ナルヲ見ル乃チ目下為ニ政府ノ益アルカ如シト雖モ將來内外人民コノニ注目シ尋テ其量目ノ不足ナルカ為ニ其信憑ヲ失ハンコトヲ恐ル於是明治五年十一月十四日ノ令ヲ請フテ量目ヲ増加シ翌明治六年二月十日ノ令ヲ請フテ其圖面ヲ改正シテ裏面ニハ日本ノ大文字ニテ通價ヲ記シ表面ニハ羅馬體ハ文字ニテ之ヲ記シ頗ル内外人民ノ認識ニ便セリ逐次世ニ發行スル多シト雖モ尚ホ旧小紙幣等ノ交換元金ニ充ンカ為メニ多少ノ小貨幣ヲ要セサルヲ得ス於是明治七年一月更ニ令シテ專ラ五錢拾錢ノ兩種

ヲ主トセシメ間々貳拾錢ヲ交ヘテ鑄造セシメ同年十二月ニ至テ復々令シテ五錢拾錢ノ兩種ハ依然トシテ專ラ鑄造シ其際更ニ貳拾錢ヲ鑄造スルコト月々拾萬圓ノ額ニ至ランコトヲ要セシム而シテ五拾錢ヲ又問ニ置クハ流通ニ不便ナルヲ以テナリ是ニ於テ乎内外人民ヨリ輸入スル金銀地金ノ高ハ減少セリト雖モ造幣寮ノ工事ハ此補助貨ト銅貨ヲ鑄造スルカ為メニ尚ホ日モ足ラサル所アリテ往々鑄造時間ヲ増加セシムルアリ而シテ近時東洋地方ニ此貨幣ノ行ハル、好機會ヲ得ルニ至レリ

**銅貨鑄造ノ事** 此貨幣ノ種類ハ前日公定シタル壹錢半錢壹厘ノ三種ニ貳錢ノ一種ヲ加ヘテ



四種トシ明治六年十二月三日ヲ以テ此鑄造ヲ  
起サシメタリ爾來月々ノ鑄造高大抵平均五六  
萬圓乃至七萬圓内外ニ至ルト雖モ尚ホ旧小紙  
幣ホノ充金ニ充ンカ為メニ其需用頗ル多ク為  
メニ替役シ一時專ラ貳錢銅貨ヲ鑄造シテ其價  
額ヲ多カラシメンコトヲ命シ斯ニ從事セシムル  
コト日アリ既ニシテ又壹錢半錢ノ兩種ヲ増鑄セ  
シムル益々急ナリ為メニ銅錢局中工業ノ時間  
ヲ増スノミナラス時トシテハ夜中ノ工業ヲ為  
シ終ニ一箇月ノ平均高拾萬圓内外ニ及ヘリ  
右開申スル所ハ則チ造幣寮工事措置ノ要旨ヲ  
舉クルノミ若シ夫レ詳カナルコトハ同寮年報書  
ニ具セシメタルヲ以テ敢テ贅セス請フコトニ

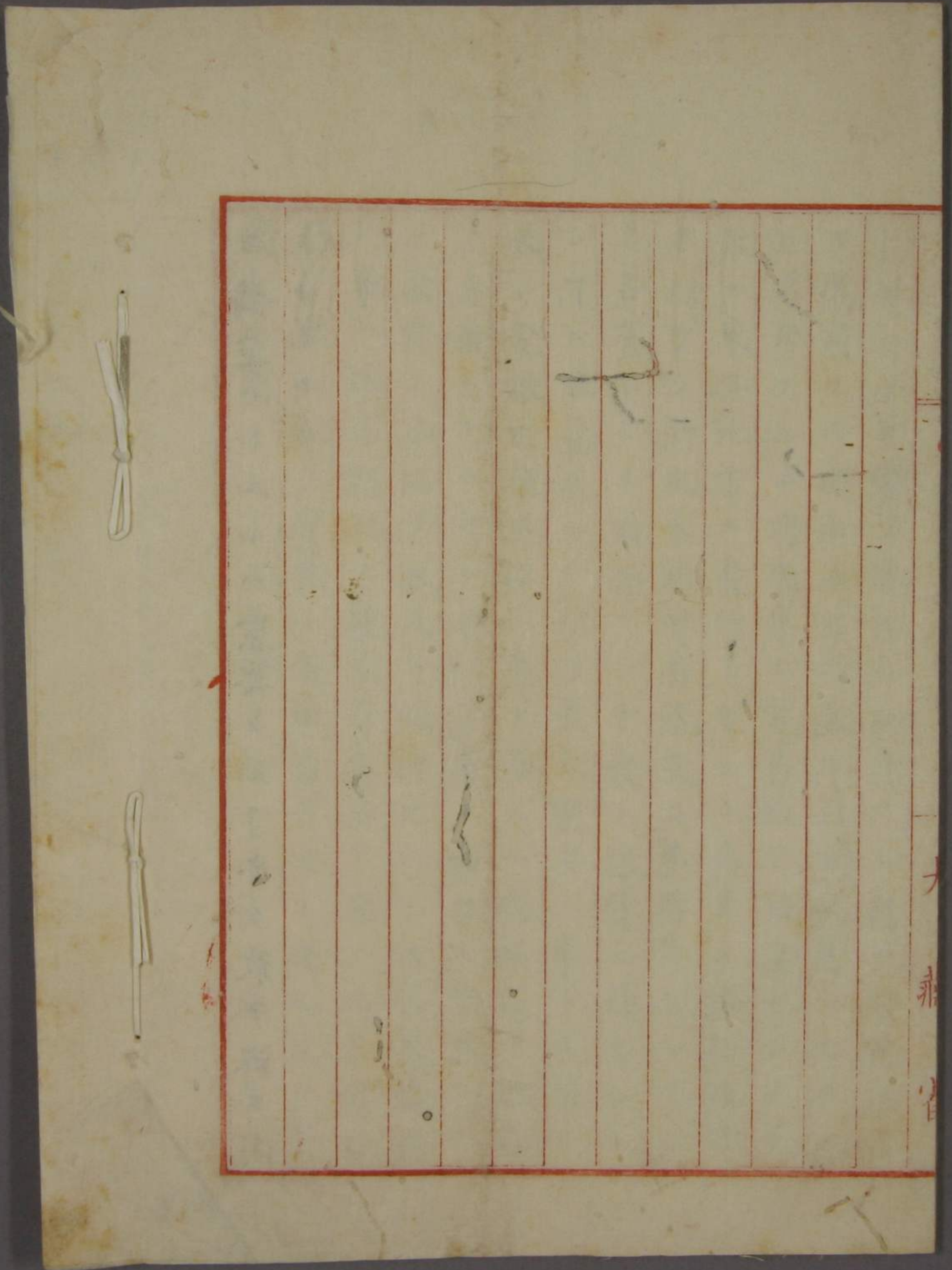
將來措置スルノ方策ヲ具セン  
抑近況字内各國貨幣ノ事實ヲ窺フニ東洋地方  
ノ銀價頗ル低下シ夫ノ金貨ヲ以テ本位トナシ  
特ニ其富有ナル英國ニ於テモ既ニ其所領印度  
地方貿易ノ為メニ宜ク金銀ノ兩種ヲ以テ本位  
トナスヘシトノ議ヲ主張スルモノアリ又米國  
ニ於テモ金銀兩種ノ本位ニ就テ同議スルモノ  
アルノミナラス是ヨリ先キ既ニ新貿易銀ヲ鑄  
造シテ益東洋地方貿易ノ權利ヲ占有センコトニ  
從事セリト聞ク此時ニ方テ我貿易銀ハ既ニ前  
段ニ述フルカ如ク東洋地方ニ於テ通用貨幣ト  
ナリ殆ント米國貿易銀及ヒ墨西哥「ドル」ト  
相抗スルノ勢アリ特ニ近時ニ至テ支那地方ニ



於テハ小貨幣ヲ要スルカ為メニ我カ補助銀貨  
ヲ需用スル者タ多キニ至ルト云フ是ニ由テ之  
レヲ考フルニ将来專ラ貿易銀ヲ鑄造セシメテ  
大ニ東洋地方ニ發行シ之レニ亞クニ補助銀貨  
ヲ以テシ漸次米國貿易銀及ヒ墨西哥「ドル」  
ノ占有シタル權利ヲシテ我カ銀貨ニ歸セシメ  
ン「ニ」注意スルヲ以テ最大緊要ノ事トス若シ  
夫レ金銀兩種本位ノ事ヲ議スル我邦目下燃眉  
ノ急務ニアラサルヲ以テ措テ論セス依然トシ  
テ金貨ノ本位ヲ永久ニ維持セントス但其鑄造  
ノ事ハ他年内地ノ農産益蕃殖ヲ極メ工業愈精  
巧ヲ致シ以テ貿易ノ道盛昌ナルニ從ヒ且ツ金  
鑛大ニ開クルノ日ヲ待テ而シテ後チ盛ニ之レ

ヲ鑄造セシムルハ緊要タル「」亦タ敢テ辨ヲ俟  
タサルナリ





大  
第  
一  
卷